

種子島の刀剣

種子島開発総合センター

種子島の刀剣展によせて

西之表市長 井元正流

種子島における刀剣製作の始祖は詳らかではないが、わが国で始めて火繩銃の国産化に成功した八板金兵衛は、濃州関の刀工で、産業のため種子島に移住したと同家系図に記されている。鉄砲伝来当時、八板氏は惣鍛冶職だったが、他に平瀬氏、牧瀬氏などがあった。鉄砲伝来以後は、後に黒山二十軒といわれた鍛冶団は、鉄砲を主とすることになった。そのためか、または西南の役や、その後続く数次の戦争に持出されて散逸したり、今次大戦後の米軍による武器狩りにより接收されたことなどのために、種子島産の刀はもとより、島にあった刀剣は極く僅かしか残っていない。

この十月の前期に、種子島開発総合センターで、「種子島の刀剣展」が開催されるが、種子島刀の文化的・美術的価値はもとより、島の近世史を繕ううえからも意義あることと思われる。この際いくらかでも種子島刀が再び姿を現わすこと、あるいは島外刀の流入図が明るくなることなどによって、郷土を知る手がかりが得られる筈と期待して止まない。そして、今後更に深く、広く掘り下げられ、研究されるよう、各位、各方面の御協力をお願いする次第です。

もくじ

一、種子島刀剣展によせて	(表紙裏)
二、国 宗(備前三郎)	一
三、国 清	二
四、伯耆守正幸	二～三
五、国 命	四
六、清 定	五
七、無 銘	六
八、カタナの名称・種別	七～十一
九、種子島の刀剣史大要	十二
一〇、種子島の刀工系譜	十三～十六
一一、出品刀剣解説	十六～十八
一二、あとがき	(表紙裏)

太刀 (銘) 国宗

鎌倉時代

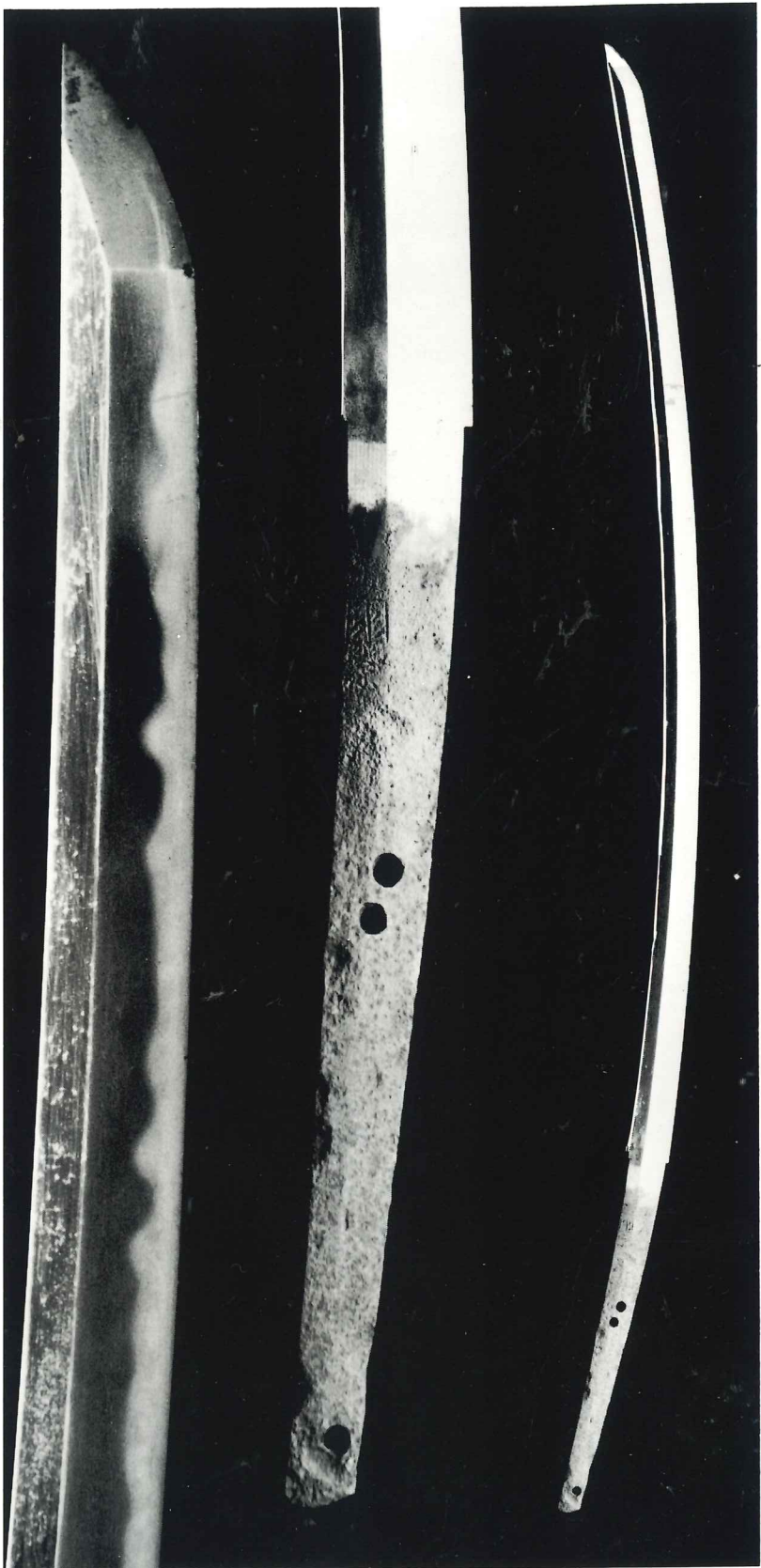
長さ九十四・〇五寸

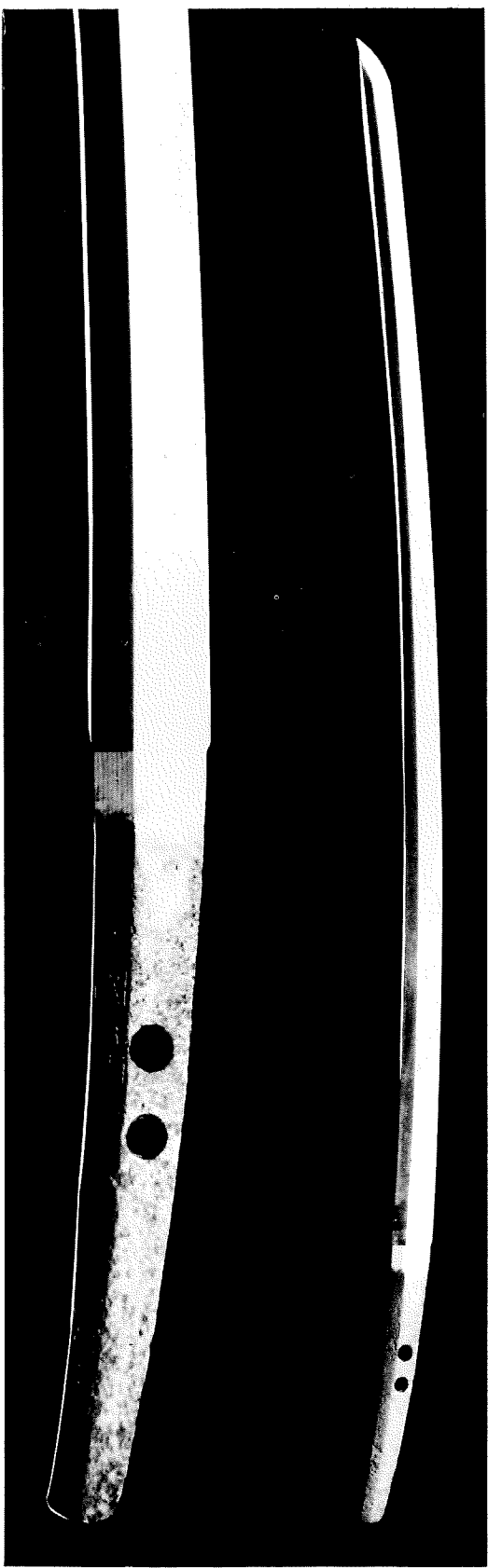
反り四・三寸

種子島時邦氏蔵

備前三郎と号す。貞永(1232)～弘安(1287)の間、備前国新田庄和氣の住人。非常に長命の鍛冶で作曆がない。あるいは、二代三代あるとの説もある。

若冠二十歳(正治元年) (1199)で幕府に招かれ鎌倉において作刀し相州伝の源流となった。後、備前に帰ったが北条時頼の命により八十二歳の高令で再度出府した(弘長元年1261)新藤五国光の親、又は師とも云われ、この時代屈指の名工である。この太刀は、種子島家重代の宝刀で鎌倉中期独特の猪首 元幅先幅の差が少ない。頑丈な造り込みで板目が約み、やや肌立つ剛い地鉄に沸つき移り立ち





▶ 小太刀

(銘) 国清 重要刀剣

長さ五十四・八種 反り一・二種 鎌倉時代
河内 一郎氏蔵

(形状)、鑄造、庵棟小振り^{いぼりむね}で鑄高く腰反り小鋒(鍔)、板目肌流れ大板目交じりで美しい。(刃文)直刃調に小乱れ、足入り、砂流し、金筋かかる。(帽子)のたれて小丸風(茎)生ぶ、先栗尻、鑄目勝手下り。自釘孔二、表に鑿の深い「国清」を切る。

この小太刀は、大和五派の一つ千手院派の作である。同派の祖は平安末期とされるが現存刀はない。この小太刀は、一見して大和物の特色を示した出来のよいもので鎌倉末期平安頃の千手院国清の作であるとされ昭和五十二年に重要刀剣に指定されたものである。

この国清の刀は、永く本源寺の温座祈念の際の破魔刀として使われた由緒ある種子島家伝来の刀である。

◀ 脇差

(銘) 表・伯耆守平朝臣正幸

裏・為種子嶋輔時雅丈鍊之
(市指定文化財)
文化六年己二月七十七歳真鍊造

長さ三十八・五種 反り一纏 江戸時代
田上 容正氏蔵

三代目正良(一説に宮原正近門人ともいう)寛政元年十二月一日伯耆守受領正幸と改めた。文政元年四月二十二日没、八十六歳薩摩新々刀を代表する誉れ高い刀工である。(作柄は、幅広大切先で豪壮なものが多く地鉄板目が良く、つみ地沸つく、沸元本位で砂流し金筋がかり芋蔓という独得の金筋様のものが刃縁にからむ自彫りの竜や旗鉾もあり上手という。又、刀剣鍛練書を著わすなど、刀工教育者としても活躍。名刀のみならず斯界に大きな功績を残した名工である。この脇差は、二十三代島主 久道の元服祝いに作らせたもの。





▶ 脇差 (銘) 種子島住国命 市指定文化財

長さ三十六・四厘 反り〇・四厘 江戸時代

井元正流氏藏

種子島の刀工で銘鑑に其の名の見える鍛冶は、十指に余るが、その殆んどが現存せず又、在銘のものを見ない。この時代は、諸国にも名工は少ないのであるが、薩摩に一平安時代 主水正清、波平安国 伯耆守

正幸等、名工が輩出して世に薩摩刀の声価を大いに高めた。国命は、この時代の刀鍛冶で幸い在銘のものが、数口現存している。姿に品位があり総体に頃合で手持ちが良く地鉄剛く鍛え精緻で地刃共に沸つき砂流し金筋入る。特に物打から上の焼巾広く沸匂も激しく強くつき帽子は小丸、返りや、深く締りごころ、茎なかごすりの鑢は切である。非常に作域の広い鍛冶であったと思われる。浅薄な偏見との叱正を承知で種子島が誇りうる名工であり種子島正宗であると畏れずにたたえたい。

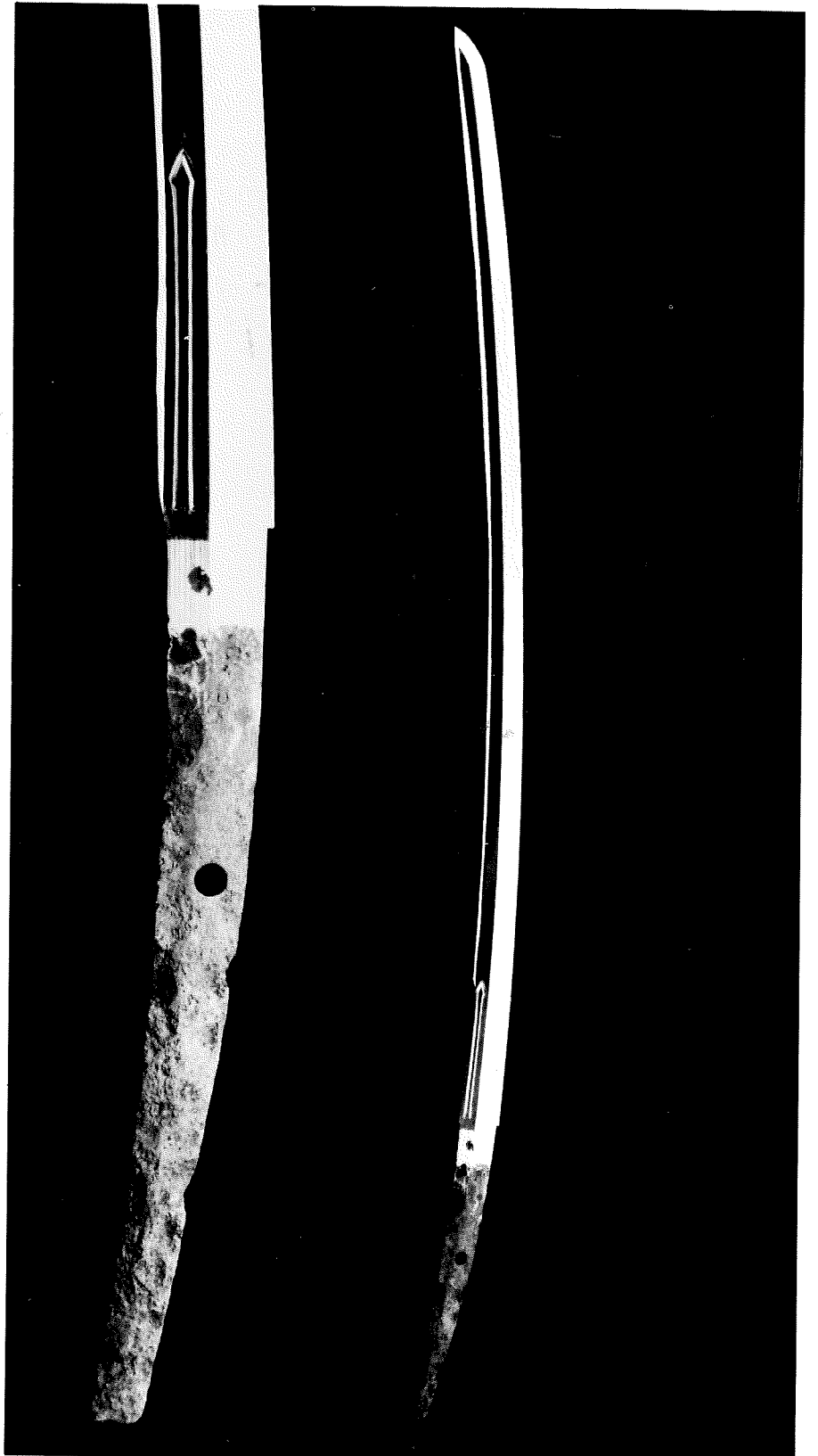
◀ 脇差 (銘) 種〇〇住〇定

長さ四十一・八厘 反り〇・六厘

認定 種子島住清定

天文(1582)〜元亀(1572)の間。刀工銘鑑の中で種子島の刀工中、最も古い刀鍛冶であるが、刀工というより日本で始めて火繩銃を作った刀鍛冶の清定と云った方が、有名であろう。昭和五十五年この脇差が発見され日本美

術刀剣保存協会の審査員五人全員の同意で特別貴重刀剣に認定された。作風は、よく練れた地鉄に小板目肌ながれごころまら柃目まじり鎬地、柃目特に強く刃丈のたれ互の目乱、沸つよく、洲流し銀筋入り白気映り立つ、帽子乱れ込み刃先に寄り気味で返りや、深い地藏帽子である。南島偉功伝にいう「清定、関の剣工とあるを首肯し得る」一口で其の史的価値と共に研究資料としても貴重な刀である。



太刀

無銘

鎌倉時代初期～同時代中期

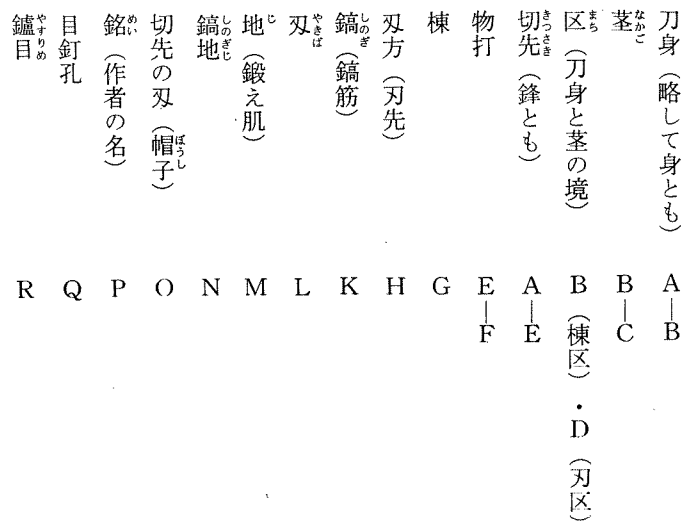
長さ七十六種 反り三・六九種

河内 一郎氏藏

この太刀は種子島家譜の編集者として知られる上妻七兵衛隆直が元禄

二年(1689)に著わした懐中島記に御家重代太刀の事として、「太刀一腰 巴長二尺五寸二分 反一寸二分信基相傳」と掲載されており信基公が北条時政より譲られた備前三郎国宗より先に書かれており恐らく信基公が佩用していたものではないかと思われる。茎、銚下に^{はばき}の印が細タガネで切つてある。これが巴と言われるゆえんか。

一 カタナの部分名称



二 カタナの種別

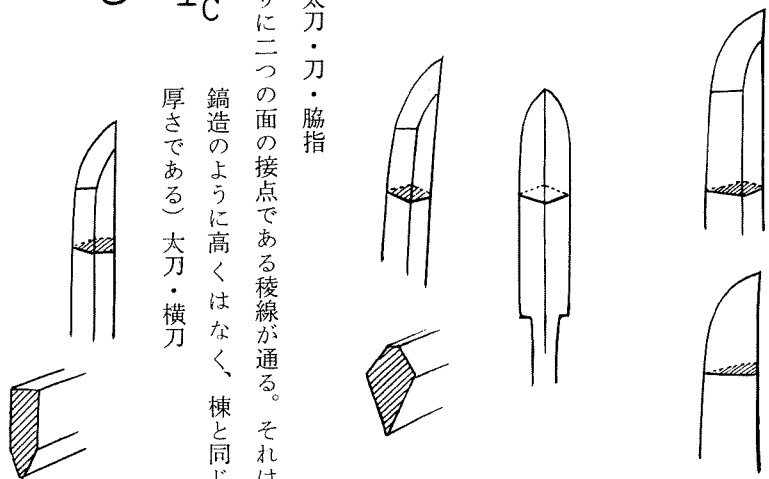
広くカタナと称するものの中には太刀・刀(打刀)・脇指・短刀・薙刀・長巻・剣・鉾・槍などが含まれている。これを形の上から分類するとおおよそ次のようになる。

片刃造(刀身の一方が棟で一方が刃となるもの)
 太刀・刀・脇指・短刀・薙刀

両刃造(刀身の両端が刃となるもの)
 剣・鉾・槍

鎬造(刀身の中程の棟寄りに二つの面の接点である高い稜線が通り、断面が長菱形となるもの)
 太刀・刀・脇指

切刃造(刀身の刃先寄りに二つの面の接点である稜線が通る。それは鎬造のように高くはなく、棟と同じ厚さである)
 太刀・横刀



平造(刀身の断面が長

三角形のもの)短刀

両 鑄造(刀身の表裏

とも中央に高い稜線が通
り、断面が菱形となるも
の)剣・槍・鉾

平三角造(刀身の一面
が平らで三角形に突き出
すもの)槍

直刀(身に反りのないもの)太刀・横刀

彎刀(刀身に反りのあるもの)太刀・刀・脇指

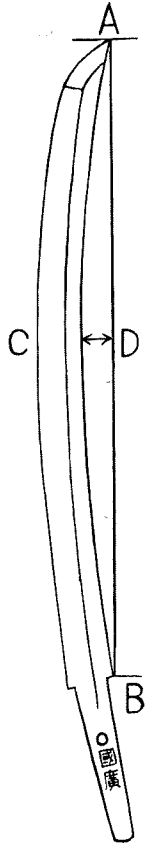
短刀は大抵反りはないが、これを特に直刀と呼ぶことはない。太刀と
横刀は上古時代、奈良時代、平安中期頃のカタナ(切刃造で直刀)に対
してこの文字をあてる。

太刀・刀・脇指は同形であり、その区別は寸法(刀身の長さ)によ
る。即ち

二尺(六〇・六センチ)以上あれば太刀と刀

一尺から二尺の間のもの 脇指

なお短刀は刀身長が一尺(三〇・三センチ)以下のものを言う。



棟の形

丸棟(半月形)

太刀・横刀



長さ(反りの計測法(左上図参照)

長さ 切先(A)から棟区(B)までの距離

反り その直線と棟との間の最も遠い距離((C)-(D))

二尺以上の太刀と刀の区別は刃の方を右に向けた場合その面の茎(柄
中にはいる部分)に銘(作者の名)を刻しているものを太刀と言ひ、
それと反対に、刃の方を左に向けた場合、その面の茎に銘を刻してい
るものを刀と言う。薙刀は太刀に準じ、脇指と短刀は刀と同じである。

槍は身が一筋のもの 直槍

身に枝がつくもの

片枝は

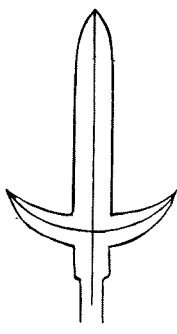


片鎌槍

両枝は



十文字槍



に大別される。

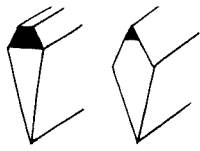
三 カタナの部分説明

庵棟(三角形)

太刀・刀・脇指

三つ棟(梯形)

短刀



身幅

広い、狭い、頃合

重ね(身の厚さ)

厚い、薄い、頃合

鎗幅

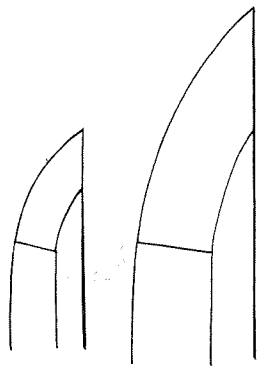
広い

切先

大きい
(大切先)

小さい
(小切先)

頃合
(中切先)



反り

高い(強い)、浅い

鳥居反り

反りの中心が刀身の中程にあるもの。

腰反り

反りの中心が刀身の腰元に寄っているもの。

先反り

刀身の上方(切先寄り)がやや強く反っているもの。

茎の銘

作者銘

二字が多いが、住所や官名を添えたものもある。

製作年月日

(作者銘のある面の裏側にきるので裏銘とも言う)

象嵌銘

後の鑑定家が作者を推定してその名を金で象嵌し

地(鍛え肌)

朱銘

同じく推定名を朱漆で記したもの。

試銘

試切手がカタナの切れ味(切れ具合)を記入したもの
で多くは金で象嵌する。

板目

肌が目が真直ぐに流れて層状になるもの。

柾目

肌が目が渦巻状になり、それが連なるもの。

杢目

肌が目が小さくつむもの。

映

鍛え肌の上に白く霞のようにかかるもの。

直刃

真直ぐな刃文

乱れ刃

出入のある刃文

のたれ刃

波のうねりのような刃文

直刃

焼幅のせまい 細直刃

乱れ刃

ひろい 広直刃

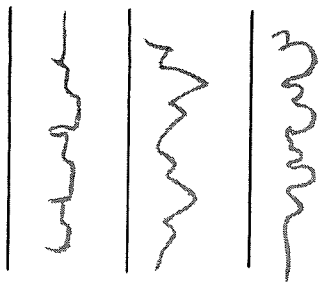
乱れ頭

中間 中直刃

丸いもの

尖るもの

角ばるもの



乱れの形の揃うもの
(互の目)

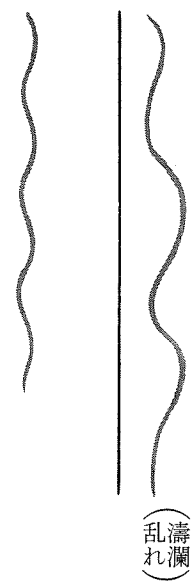
乱れの腰の開くもの

地一面に乱れ刃の散るもの
(皆焼)

のたれ

振幅の大きいもの

小さいもの



溝瀾
乱れ

匂

肉眼で見分けにくい程の細かい粒。刃がそれで出来ているものを匂出来と言う。

沸

銀砂子を蒔いたようにあらい粒。それによる刃を沸出来と言う。

(同質のもの的大小による区別である)

切先の刃(帽子) (次の図参照)

① 直ぐ
乱れこむ

ど変らないので、この点を重視する。反りも変えられていないことが大切である。

すりあげ 茎の方を切りつめてカタナの寸法を短くする。昔の太刀を刀として使用した時代(室町末から桃山にかけての頃)に起った現象である。茎の先の方に元の銘を残している場合は「すりあげ」と言い、元の銘を全く切り落した場合は大磨上げと言う。象嵌銘はこうしたものに施される。

佩く・指す

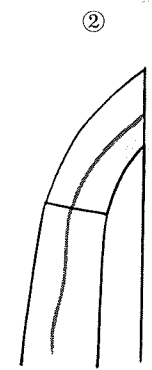
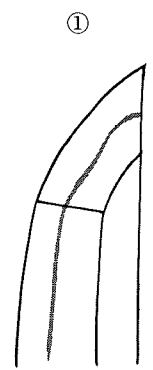
カタナを身を付けるにあたり、拵を帯取の紐で吊って水平に腰につけるのを佩くと言ひ、拵を帯の間に斜に指込むのを指すと言う。この場合佩けば中の刀身は棟が上になり、刃先は下を向き、指せば刀身の上下はそれと逆になる。従って刀身の表側(体の外側になる方)は両者では反対関係になる。前者は太刀、後者は刀である。作者の名(銘)は表側に当る方にきるのが原則であるので、太刀と刀とは銘のある側が反対になる。

太刀は平安・鎌倉・南北朝の各時代に行われ、刀は室町・江戸の各時代に用いられた。

短刀の確実な遺例は鎌倉時代からのものが知られており、その後各時代にわたって作られている。

脇指の寸法ものは室町時代から作られはじめ、江戸時代には多くの例があり、特に刀と一組のものと同じ意匠の拵にいられた。これを大小と呼んでいる。

② 焼詰める
返る



彫物

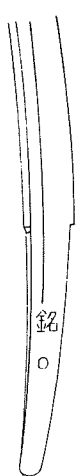
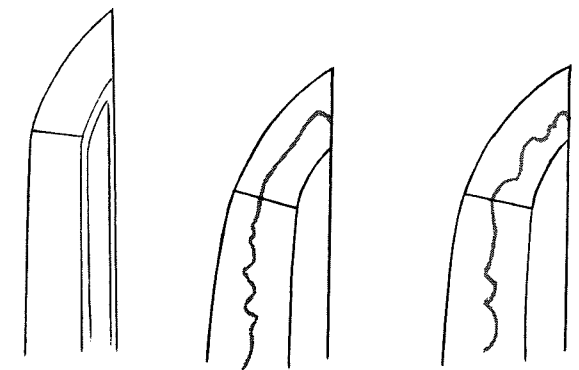
刀身に加えた装飾で、文様や文字を刻みこむ。減量すると言う実用な意味のものと(鎬地に彫る大きい樋)

祈願すると言う精神的意味のもの

仏像・仏の種子(梵字)・神仏の名・経題・仏の持物(仏のシンボル)—— 剣・護摩箸・棒など)・俱利迦羅竜||大日||不動

生ぶ・すりあげ

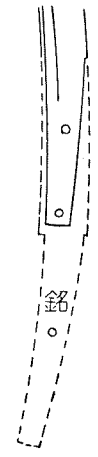
作られたままの状態。但し大抵研磨を加えられているので身幅や重ねは多少減じている。しかし長さは殆んど



生ぶ



磨上



大磨上

(「日本の刀剣神奈川県立博物館」より転載)

種子島の刀剣史大要

平山 武章

建仁年間、平信基が南海十二島を受領して種子島に下るに際し、北条時政が、大刀一振(冶工国宗)を与えたことを種子島家譜は冒頭に伝えている。十九代の久基はその著「我目分明記」に、この大刀を(松作)と号、長二尺八寸五分、反一寸三分と記し、他に長二尺五寸二分、反一寸二分、無銘、も重宝として列記している。上妻隆直の「懐中島記」はこの無銘の刀を(巴作)と号、としている。なかごの下の方に、三巴と見られる文様が切つてあることから付けられた号という。

しかし私はこの文様を梵字の(イ)と断定したい。この(イ)の字は、密教の伊舎那天の種子。伊舎那天は自在天の忿怒身を現わしているといわれるが、(巴作)が修験道と深くかかわっていることは明らかである。

応仁の乱の前、寛正年間、大城の馬立宿で消息を絶つた十代島主幡時の遺品の諸刃の直刀、これも密教の降魔の利剣、独鈷柄か三鈷柄の剣と見られるが、あるいは豊後の彦山系の刀工の作ではなかったか。または、当時すでに武蔵の国から来島していた牧ノ瀬鍛冶の作では、などと思いは羽搏く。

そしてはじまる戦国乱世。その渦中の美濃の国から、大永年間すでに、鉄を求めてはるばる来島した刀工・八板清定。その名は国産鉄砲の生みの親とし余りにも有名だが、それだけに、いわば幻の刀工といわれるものの、現在その刀工としての評価も極めて高い。 覇を争う群雄達は、対立する敵の鉄や塩の道を断ち切ることが重要な

戦略だった。そうした情勢を睨みながら種子島は熊野三山の勢力と組んで、鉄や塩の輸出を行っていた。そして刀工も金工も野鍛冶も育っていた。

天正七年、豊後の大友宗麟が十四代島主時堯に、大刀一振、刀一腰を贈っているが、これは島津に対する一戦を考えた、種子島との接近策の一つともみられる。当然、豊後でも名だたる刀工の秀作を贈ったにちがいない。

文化元年、刀工調べがあり名鑑ができたが、それによれば、天文の間、八板清定。天文文祿の間、平頼国清。慶長の間、平頼清定。正保明暦の間、八板清定。宝永の間、平頼定行。安永天明の間、牧瀬国命。寛政享和の間、平瀬良等、平瀬良則、牧瀬国肥、牧瀬良定。以上十名である。名鑑外に、安永年間に田上七左衛門が自作の刀を献上して郷士となった記録はあるが、刀工としての銘名はない。

とまれこの間約二百四十年、十名の刀工しか挙っていないのは意外である。一方、鹿児島県維新資料編纂所の「鹿児島県鉄砲鍛冶名鑑」によれば、天文から文化までの鉄砲鍛冶数は三十四名。ダブるのは清定のみである。

文化以後の家譜記事からは刀工の名は出ない。本誌所収の刀工系図からも拾い出すことは出来ない。しかし一方、前記資料による嘉永までの鉄砲鍛冶は十八名である。これらの数字から読みとれることは、種子島の刀工は天文以後は、そのほとんどは鉄砲鍛冶に転向せざるをえなかった、ということである。

いわばこれは、鉄砲の種子島を裏付ける生きた数字ではあるが、刀剣という観点からすれば、やはり悔なしとは言いがたい。

幸い、清定、国清を始めとして残された種子島刀の数は極めて少ない乍らも、種子島刀工の優れた力量は、高い矜持と気魄を以て迫ってくるものがあると言いたい。

種子島の刀工系譜について

種子島刀工の起源については、惣鍛冶八板家系図によると、「濃州関より産業のために来島した。」と、鉄砲伝来以前すでに、この地に刀工達が存在していたことが記されている。

伝承によると初代島主が南海十二島の領主として入島の際、随伴した鍛冶集団は、南種子町下中の七ツが森に居住し、その後、領主が、赤尾木へ移住したので長男家が随行し、二男三男は、南種子に留まったというのである。(九世紀多禰島分寺が設置されていたことは、日本書紀に見えるが、その島分寺の所在地について諸説あり、判明していないが、有力な候補地としてこの南種子町下中地域があることも、刀工の起源を考察するとき無縁と思えない) 精密な発掘調査の結果ではないが、全島各所に鉄にまつわる伝説や遺跡が多いのは、その歴史の古さを髣髴させる。

島に産する豊富な浜砂鉄、島を覆う照葉樹林、遣明船の寄港地として重要な役割を果たしたことなどの歴史的・地理的条件からして、その起源は、かなり古くに遡ることが推察される。

しかし、鍛冶家系図に依拠するかぎり、刀工に端を発しながらも鉄砲伝来以前に遡ることは、不可能であり、ますますその起源を謎に導いているのである。

さて、これまで、「種子島刀工系譜」を紹介したものが少なかったもので、今後の刀工調査・研究の参考に、かつて調査したフィールドノートのみから整理してみた。

種子島の古い刀工鍛冶家系は、八板・平瀬・牧瀬・阿世知・石原の五家であるが、阿世知・牧瀬両家については焼失して現存しない。

これら鍛冶家系図の中から種子島の刀工研究に必要と思われる事項のみを抽出し列記してみたい。

一、(八板家系図)

○清定 金兵衛尉文亀二 戊正月十日生元亀午 九月八日死号法宗
有濃州関之鍛冶善刀剣為産業而来天文十二年癸卯八月南
蛮船漂来干西之村洋時携来鉄砲而獻二挺古郷於嶋主時堯
公公得於異邦之珍甚愛焉。(以下省略)

女子(若狭) 大永七年丁亥 生 慶長三 己 七月
○清賀 奎左工門 享禄四 辛 生水 慶長三 己 七月十九日死
法名宗守
女子

○清賀 今兵衛 永禄二年 己未 火生 寛永四 丁卯 八月十日死
法名隆泰

○清則 奎之熊 文禄元年 壬辰 十月廿一日生 寛文九年 己酉
八月九日死 法名

○清重 五郎左工門 正保二 己酉 十二月八日生 元禄 乙亥 五月十日死
法名隆長

○清常 鉄左工門 延宝三 乙卯 四月十八日生 正徳四、六月七日死
法名克行

○清安 鉄右工門 元禄八 丁亥 生 宝曆五 乙亥 五月十七日

○清應 今兵衛 享保五年 庚子 六月廿六日生 寛政七年七月廿一日死
修善院海運

○清乘 鉄兵衛 寛保三 亥 七月十日生 享和元年 亥 六月六日死
法名善月院晴光

○清貞 今兵衛 安永三 申 十二月廿八日生 天保二年十一月九日死
今之進 天明元年 辛 四月生

○權次郎 文化五年 戊 六月十日生 天保七年 申 十一月八日死

○鉄兵衛 文政元年十二月十五日生

鉄次郎 天保十一年九月廿八日生

女子 文政二年正月七日

女子 嘉永元年未 六月二日生

女子 安政五年 亥 二月 日生

○鉄藏 明治四年正月十一日生

二、(平姓 石原氏系図)

○○慶定 四郎左衛門尉

薩州古谿山一流之劔工而以善造刀劔奉仕於嶋主時堯公天文十二年癸卯八月南蛮船來於本島西之村有船長牟良叔舍者獻鉄砲二挺於時堯公珍愛之使鉄匠八板金兵衛清定習其製清定苦慮摸製之未得其完時清定与慶定有縁故且以慶定為鉄匠共研究其製造之術於是慶定亦與船長交際深密也居数月而船婦臨別船長贈瓶子一雙鉢一對于慶定以寓別意焉同十三年甲辰詠船再來干坂井村熊野浦於是清定傳受鉄砲製造之奧技此時慶定亦興焉云

女子

○慶清 大学
○有故胃牧瀬氏

○慶清繼父業為劔工 時堯公曾使平瀬石見牧瀬大学各造刀劔一口後 公於馬毛島斬鹿而試其利鈍石見所造者利而大学所造者鈍也 公告以美大学云臣所造者非斬鹿之刀割用之刀也 臣希於公前割鉄板以試利鈍耳乃割之鉄板兩斷於是公愛之矣

則次 四郎兵衛

則定 平右衛門

則以 四郎兵衛

女子 平右工門

能 平右工門

○則正 平左工門 生年月日不詳 死年月日不詳淨運

女子

女子

木土右工門

○則名 四郎左工門 權之熈 元禄九年丙子生 元文五年庚申二月二十五日死享年四十五 法号法持院蓮香信士

日行 可須 奉仕 栖林公後故為出家

女子

女子

男子 早世

則 平六

○常愛 李太郎 文政九年 丙 正月六日生 実柳田直助常行二男也
四郎次則房無嗣子継家統 明治三十四年十月十日歿
明治某年砲兵工廠遺十河某徴銃工八名吾種子島常愛為其一吾島古来巧銃製故及焉

女子 嘉永二年 己 十二月十七日生

女子 安政元年 甲 七月七日生

男子 天亡

則次 安太郎 安政三年 西 五月廿一日生

女子 天亡

女子 文久元年 辛 正月廿三日生

○則義 李之熈

三、(平姓 平瀬氏正統系図)

国清 岩見

○国清之先出於平氏 初 信基公之受封于南海十二島也 国清之先実従来云

○永禄間称寝重長侵竹島及屋久之一湊遂放火於永良部之家以報前年屋久島之役時、岩見在永良部卒島人拒之不克而被執重長以之帰後窺間独航海而帰(伝記焼失につき師範不祥)

○清定 新兵衛

○清定善鍛文禄二年從 久時公赴朝鮮屢有戰功適見彼仏寺中所置之三十三燈籠形制頗奇帰後擬而作之 献於本源寺爾來損則吾家補之以為常

○清 新兵衛

○享保五年庚子生寶曆十二月廿七日死法名年庚辰信受院妙香信女
○延享二年乙丑三月廿六日死法名法性了作

○国命 樽千代 李之熈 安兵衛

○享保七年壬寅生

○安兵衛繼祖先之業為劔工也故從学於鹿兒島府之名匠奥国平数年成於是国平許用具其偏諱国字即改名国命

○寛政二年庚戌七月十七日死享年六十九法号本光院宗修信士

則次 早世 善次郎 延享四年丁卯十一月十四日死法名霜林

女子

常盈 平五郎 市郎左工門 享保十七年壬子生

柳田三右工門為養子 安永二年癸巳八月廿五日死

法名柳権院宗善

女子 宝曆元年辛未生 文化八年未二月十八日死

法名瑞如院修信女

女子 宝曆四年甲戌生

則行 榮之熈 宝曆八年戊寅生

○国肥 四郎次 安兵衛 宝曆十一年辛己生 文化十一年甲戌二月十五日死 法号仲陽院蓮禎信士

則熈 瑞陽 尚菴 明和八年丁 四月朔日生学医業而樹家

文政十二年 己 五月廿一日死法号開示院悟入信士

○則房 四郎次 李兵衛 始則宗 天明四年 甲 十月廿八日生

則房初從干鹿兒島劔匠奥大和守平朝臣元平学鍛劔以為業而後好闘一流働之云

女子 寛政四年 壬 子生

女子

男子 早世

清 八郎

○清 藤兵衛

○清 孫平

○清 新兵衛

○良等 平兵衛 宝暦元年生 文政七年十二月死

良等善作刀 初学其法於本府之伊地知正良遂得其訣於是正幸
興之偏諱幸字云

○良 宗(則か?) 平右衛門

寛政元年生 天保十三年寅三月三十一日死

師範薩州正良

○清 等 直八 寛政元年生 弘化四年丁未 五月四日死

二、正徳五年二相果申候

三、正徳時分之鍛冶

四、享保之頃ヨリ安永二二死去

五、宝暦 安永二二死去

嫡子 柳田市郎左エ門(益常)

六、享保

柳田一郎左エ門 常命

七、天保

柳田直助 常行

右之通ニ御座候 以上

九月二十三日

柳田市郎左エ門

四、(柳田家系図)

系図は実見できないが、惣鍛冶八板家に保管されていた古文書に
つぎのようにみえる。

寛

一、正保之頃 元禄之時分

柳田三右エ門 常則

但 元禄八年二相果申候 八板五郎左エ門清重弟子

柳田市兵衛 常次

五、(種子島家譜第二巻中より追加)

文化元年十一月二十一日

○宝永年間 定行(平瀬太郎兵衛)

右師範家薩州奥和泉守忠重

○当時 良定(牧瀬休治)

右師範薩州正良

(出品刀剣等解説)

1. 太刀 銘・国宗

長さ九十四・〇五糎 反り四・三糎

種子島時邦氏藏

2. 小太刀 銘・国清

長さ五十四・八糎 反り一・二糎

(鎌倉時代)

河内一郎氏藏

3. 脇差 銘表(伯耆守平朝臣正幸)

(裏)為種子嶋輔時雅文鍊之文化六年己二月七十七歳真鍊造
長さ三十八・五糎 反り一糎

(江戸時代)

田上容正氏藏

4. 脇差 銘・種子島住国命 市指定文化財 (江戸時代)

長さ三十六・四糎 反り〇・四糎

井元正流氏藏

5. 脇差 銘・種〇〇住〇定

長さ四十一・八糎 反り〇・六糎

(室町時代)

認定種子島住清定

6. 太刀 無銘

長さ七十六糎 反り三・六九糎

(鎌倉時代)

河内一郎氏藏

7. 刀 銘表(正国六十三代孫波平住大和守平朝臣行安)

(裏)慶応三年二月日望依作之 (江戸時代)

長さ八三・四九糎 反り一・二糎

8. 刀 無銘 特別貴重刀剣

長さ六十七・六糎 反り一・七糎

認定 兼定

9. 脇差 無銘 特別貴重刀剣 (南北朝時代)

長さ四十一・二糎 反り〇・四糎

認定 氏房

10. 刀 銘・種子島住国命 江戸時代

長さ六十九・六糎 反り一・八糎

11. 刀 銘・波平家利 特別貴重刀剣

長さ六十九・八糎 反り二・二糎

12. 脇差 銘・波平安常 特別貴重刀剣

長さ三〇・八糎

13. 打刀拵 特別貴重小道具

黒色塗鞘

14. 変塗鞘小刀拵特別貴重小道具 (大正時代)

15. 刀 銘・月山貞勝 特別貴重刀剣

長さ六十九・七糎 反り二・八糎

16. 短刀 銘・吉光 (室町時代)

長さ二〇・四糎 反り〇・〇糎

河内国員氏藏

- 17. 脇差 銘・廣(以下切る) (江戸時代)
長さ四十七・六糎 反り一・〇糎 河内 国員氏藏
- 18. 刀 銘・国命 (江戸時代)
長さ六十七・四糎 反り一・三糎 河内 国員氏藏
- 19. 刀 銘・備前国住長船与三左衛門尉祐定(室町時代)
長さ六十四・五八糎 反り一・九八糎 河内 俊男氏藏
- 20. 脇差 銘(表)相州住 正 (室町時代)
(裏)宝徳三年二月日 長さ三十八・五糎 反り〇・五糎 種子島家伝来の刀 河内 俊男氏藏
- 21. 短刀 銘(表)則廣 (江戸時代)
(裏)文政六年二月日為西村時貴造 刃長二十糎反〇・〇糎(小牧の河内家にあつたもので種子島刀工の作ではないかと思われる) 河内 俊男氏藏
- 22. 脇差 無銘 大磨上 おすりあげ
長さ五十二・四七糎 反り一糎 河内家伝来の品 河内 一郎氏藏
- 23. 刀 銘・関住兼 (江戸時代)
長さ七十一・六糎 反り一・四糎 石堂 英憲氏藏
- 24. 脇差 銘・隅州住貞宗 (江戸時代)
長さ四十一・二糎 反り〇・八糎 河北 英世氏藏
- 25. 短刀 銘・元成
長さ二十六糎 反り〇・五糎 深田 行徳氏藏
- 26. 脇差 銘・和泉守兼定作 (江戸時代)
長さ四十四・四糎 反り一・〇糎 深田 行徳氏藏
- 27. 刀 銘・波平安親作
長さ六十九・三糎 種子島 久時氏藏
- 28. 鐔 銘・種子島住兼近文化元年四月吉日 河内 一郎氏藏
- 29. 刀剣図譜 巻巻 平瀬 キヨ氏藏

あとがき

今回の展示会は、種子島の刀工の作を中心に、種子島と関わりの深い刀、島内に愛蔵されている刀などを集め、それらを通して、種子島の刀剣・刀工の解明の手がかりを求め、そしてこれは、なお退蔵・死蔵されている刀剣の発掘にもつながること、などを考えたのでありますが、ある程度、庶幾の目的に近ずき得たのではないかと考えています。さて、これは内わのことではありますが、各委員の蘊蓄をかたむけての御尽瘁、そして極めて困難・煩雑な事務と作業を、みごとに処理された事務局の御苦労、ここに心からの感謝と敬意を表する次第であります。

種子島刀剣展実行委員長

平山 武章

種子島の刀剣展実行委員会

- | | |
|---------------|-------|
| 委員長 | 平山 武章 |
| 副委員長 | 伊東 安年 |
| 委員 | 河内 一郎 |
| 委員 | 深田 行徳 |
| 委員 | 形岡 司三 |
| 委員 | 河内 俊男 |
| 委員 | 河内 国員 |
| 委員 | 鳥居 士郎 |
| 西之表市教育長 | 河東 瞭 |
| 種子島開発総合センター所長 | 河東 瞭 |
| 主任 | 鮫島 安豊 |
| 主事 | 田上 利男 |

第一回種子島刀剣展

期 日 昭和五十九年十月一日～十月十四日
場 所 種子島開発総合センター
主 催 西之表市・西之表市教育委員会
後 援 南日本新聞社